

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## エネミー・ライン

2002 (平成14) 年3月17日鑑賞

Data

監督：ジョン・ムーア

出演：オーウェン・ウィルソン／ジ  
ーン・ハックマン／ガブリエ  
ル・マクト

### 👁️👁️ みどころ

舞台はバルカン半島のボスニア。米原潜カール・ヴィンソンは和平交渉の監視のためアドリア海に展開中。偵察撮影に赴いたクリス大尉は思わぬものを撮影。そこから思わぬ大事件へ・・・。アメリカからみたスーパーヒーローアクション戦争映画だが、それなりに緊張感のあるいい映画だ。但し、ボスニア問題、ユーゴ問題の歴史的背景の勉強は必要だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ボスニア紛争の基礎的学習>

2002年3月の今、オランダ・ハーグの旧ユーゴ国際戦犯法廷で、「人道に対する罪」などに問われたミロシェビッチ前ユーゴスラビア連邦大統領の裁判が続いている。ユーゴ連邦コソボ自治州でのユーゴ連邦軍によるアルバニア系住民虐殺に、ミロシェビッチ前大統領がどう関与したかが焦点だ。日本は戦後復興の後、1960年の日米安保条約の下でアメリカから安全を保障され、平和を謳歌してきたが、昨今やっと有事法制や憲法改正の議論が始まりつつある状況だ。しかし、この間世界では、ベトナム戦争をはじめ、中東でのイスラエルVSアラブ問題や、インドVSパキスタン問題など、長期にわたる深刻な戦争状態が続いている。

アメリカとソ連との冷戦の終了後ハンガリー、ポーランドなどの東欧諸国においては共産主義体制の崩壊とその転換が続いた。そして1997年には、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリーの三国がNATO（北大西洋条約機構）に加盟した。このような動きに呼応して、いわゆるバルカン半島では、1990年頃からずっと継続的にクロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ユーゴスラビア、アルバニア、コソボなどで民族紛争が多発し、クロアチア戦争、スロベニア戦争、ボスニア・ヘルツェゴビナ戦争など深刻な戦争状

態が発生した。さらに1999年には、NATO軍による空爆という事態も発生した。

日本人は概ねこのような複雑な国際紛争の問題には興味が薄い。そのうえ特にバルカン地域での民族紛争は複雑でややこしい名前がたくさん出てくるため、苦手な領域だ。ミロシェビッチ裁判は、ユーゴスラビア連邦のコソボ自治州で、セルビア兵によるアルバニア系住民の虐殺があったか否かという争点だけに、分かりやすいともいえるが、その根は深く複雑だ。

### ＜アメリカの原子力空母とNATO郡＞

この映画は、そんな緊張状態の続くボスニア・ヘルツェゴビナが舞台である。またアドリア海に浮かぶ米海軍の原子力空母USSカール・ヴィンソン乗り組みの海軍大尉クリス・バーネット（オーウェン・ウィルソン）が主人公だ。この映画の大筋を理解するため、ボスニアやユーゴなどの概略の地図を示しておこう。

バルカン半島のボスニアヘルツェゴビナでは和平交渉が続けられていた。アメリカ軍の空母USSカール・ヴィンソンは、アドリア海において、和平交渉を監視する任務を担っていた。そのため偵察飛行を繰り返していたが、クリスはこの任務に飽き足らず、海軍の退役願を出してしまった。しかしクリスマスで仲間が浮かれている時、クリスには同僚のスタックハウス（ガブリエル・マクト）と共に、偵察撮影の任務が与えられた。その偵察飛行中、クリスは不審なモノを察知し、予定された飛行経路を外れてまでもこれを写真撮影しようとした。すると、予想もしない大反撃が……。NATOに報告していない部隊を集結させていたセルビア人勢力は、見られてはならないものを写真撮影されたことに気づき、ミサイル2基を発射した。クリス達の乗るF/A-18スーパーホーネットを本気で撃ち落としにきたのだ。クリスとスタックハウスは、この2基のミサイルの追尾を逃れようと、必死で大立ち回りを演じるが、結果的にはアウト。2人は生命からがら、機から脱出して、パラシュートに揺られ、未知の国の中へ降り立つことになった。そして地上で直ちに救出を要請。数時間後には難なく救出してもらえるものと思っていた。しかし……。現実にはそんな甘いものではなかった。

### ＜救出か、それとも見殺しか＞

脱出時に足を怪我したスタックハウスは、セルビア人部隊に見えられた後、ロクな尋問を受けることもなく、その場で射殺されてしまった。山の上に登り無線連絡をしようとしていたクリスは、これを見て思わず声をあげた。そのためクリスは敵に見えられ、ここから生命がけの逃走が始まった。クリスの上司のレズリー・レイガート司令官（ジーン・ハックマン）は直ちにクリスの救助に向かおうとするが、NATO軍トップは、クリスが予

定の飛行経路を外れて偵察飛行をしようとしたことがバレると和平交渉にヒビが入り、決裂することを恐れ、その救出を拒否。クリスは自分が軍人として忠誠を誓ったアメリカ合衆国から見放されることになってしまう。

クリスのたった1人の逃走劇、そしてこれを何とか救出しようと苦悩するレズリー司令官やクリスの仲間たち。この緊張関係の中、スクリーン上では迫力ある逃走劇が展開される。そして最後は・・・。

### <アメリカ讃歌のスーパーヒーロー>

もともとアメリカ讃歌的な戦争アクション映画だと予想しており、現実にもその通りの作品だったが、それでもこの映画の「緊張感」は結構すぐれたものがあり、十分に楽しむことができた。まずはクリスの乗るF/A-18スーパーホーネットがミサイルに追われ、遂には墜落する場面のスピード感と迫力は圧巻。またボスニアの地を、目的地に向かって必死に逃げるクリスを通じて、ボスニアの町の崩壊ぶりや現地の人達の苦悩する様子がうまく伝わってきて興味深い。さらに、最後に救出されようとするクリスはあくまで写真撮影したフィルムにこだわり、これを取り戻そうとする。本当に、アメリカ合衆国軍人の見本のような姿勢で、多少ヒーロー臭くなりすぎの面もあるが、「アメリカ万歳」のエンディングだからそれも仕方ないか、と納得させられてしまうほどカッコよく出来ている。

アメリカから見た「スーパーヒーローアクション戦争映画」としては十分良くできている。しかし本当は、この映画を観ることによって、バルカン問題やボスニア問題に日本人が興味を持つきっかけとしてもらいたい、と私は思う。

2002（平成14）年3月記